

編集後記

当『早稲田大学図書館紀要』が通巻五〇号を迎えた。途中、年二回刊行の時期もあったが、ほぼ年一冊のペースで編集刊行を続け、五〇号に至ったことは、館内外の関係者諸氏のご協力・ご努力の賜物である。天理図書館の「ピブリア」がすでに通巻一〇〇号を超えており、まだその半分にもみたくないわけだが、ともあれ、まずもって自他ともに慶賀すべきことであろう。

図書館紀要が五〇号をかぞえるあいだに図書館が経てきた変化はきわめて大きい。むしろ変わらない部分もあるが、全体としてはやはり大きく変わったといわざるを得ないだろう。本号の巻頭に載せた三人の館長が在任した最近の一二年間に、とくにそれは顕著であったように思われる。この一二年間というものは、早稲田大学の新中央図書館が竣工開館してからの時期にはば重なるわけであるが組織も、人も、業務形態も、中央図書館開館当初は想定していなかった変化をみせている。筆者が受け持っている教育学部の司書資格関連科目「図書館学Ⅰ」の授業で、「図書館の未来」というレポートを学生に書かせてみた。図書館学をとるような学生だからかもしれないが、現在あるような図書館が消滅し電子図書館になる、と書いている学生はひとりもなく、いぜんとして皆、紙に印刷された「本」がたくさんある図書館というものを、頭に描いているようであった。

「本」の世界がおかしくなっている、ということが、ここ数年声高にいわれている。人は、みな生きている時代の枠組から、なかなか抜けることはできないのであるが、それはやは

り出版界や出版流通業界が、みずからの制度疲労と本の売れ行き鈍化とを重ねあわせ、電子メディア全般を紙媒体の本の「敵」と考えて過剰反応しているに過ぎないのであって、人間の知的営為に格別変化はないわけだから、今後しばらく、「本」は消滅したりはしないであらう。本が電子メディアに決定的に劣るのは、情報の速報性という面だけであるからである。今後図書館は存続するだけでなく、電子メディアと密接にかかわりながらではあるが、「本」という「紙媒体」もまた存続してゆくだらう。

しかし最近 bookstore、古書店員、出版社の編集者などのレベルがひどく低下しており、よい本が出版されにくくなってきている。また、図書館界全体のレベルもパワーも落ちていることは覆うべくもない。図書館業務のかなりな部分がアウトソーシングの対象となっているし、本の製作も多くの場合、編集者というよりは下請けのアルバイトが実務をやっている。プロが育つ条件はかなり厳しくなってきたといわざるをえない。しかし、かなりな部分アウトソーシングするとしても、業務の大筋、核になる部分は、プロがきっちりと担っていなければならない。図書館の場合、核になるのは資料知識を持つ人材である。しかしそれは、「本の虫」とか「書痴」というような人々のことではなく、特定の狭い学問領域にのみ専門性を有する人でもなく、分野的に比較的偏らぬ知識と、出版文化に対するセンスをもった、バランス感覚のある常識人のことであると思う。そうした図書館人の育成・研鑽の場として、この『図書館紀要』がいささかなりとも貢献するなら嬉しいことだ。

二〇〇二年七月、元図書館職員、茂木堯秀氏が亡くなられた。同氏は昭和三四四年、本紀要の創刊以来、その編集の仕事に携われ、退職まで、第一号から第二〇号までの紀要編集を担当された。茂木さんは、『図書館紀要』の新しい号をお送りするたびに、感想をこまかく丁寧に記したお葉書を送ってくださり、私も後進の者に、あたたかい励ましのお言葉を寄せて下さっていた。今後よくあの葉書が届かないと思うと寂しい限りである。心よりご冥福をお祈り申し上げたい。

なお今後とも当紀要に対して、ご支援とご協力をおねがいする次第である。（松下記）

早稲田大学図書館紀要編集委員会

松下真也（図書課長） 小林邦久（図書課

目黒聡子（整理課） 渡邊朝子（図書課

前号の訂正

『早稲田大学図書館紀要』第四九号（二〇〇二）一九頁上段の写真のキャプションで、写真家のお名前前に誤記がありました。謹んで訂正いたします。 図書館紀要編集委員会（誤）折原 恵 ↓（正）折原 恵

早稲田大学図書館紀要 第50号

二〇〇三年三月十五日 発行

編集

早稲田大学図書館紀要

編集委員会

発行人 旭

英 樹

印刷所

早稲田大学図書部

早稲田大学図書館

東京都新宿区西早稲田一ノ六ノ一

〇三（三三〇三）四一四一